

ウルエちゃん

奥山和子

「レイちゃん、いるか？」という声がする。

あれはウルエちゃんだ。私はレイちゃんではないが、むこうもウルエちゃんではない。ウルエちゃんはお天気やさんだ。

「レイちゃんは、今日はおじいさん？ おばあさん？」とおかしなことをきく。

「おばあさん？ おばさんくらいにして」

「レイばあか」

「レイじいならなまけものっていうんだ」

「あたり。おでかけするの？」

私はけんこうのために六千ぼあるくようにいわれている。かえり道でかいものもする。

「ついてく」とウルエちゃんはきめた。

「えーと、水のボトルに、キャンディ三つに、まんぼけいに、さいふ」と私はバッグに入れていく。「あと



は、ぼうしとマスク」

「マスクって？」

「コロナよけです」

しんがたコロナウイルスなんて、ウルエちゃんにかんけいあるのかしら。ウルエちゃんはむぎわらぼうしをかぶって、白いポシエットをかたにかけているだけである。

「レイばあさん、おそいよー」とウルエちゃんはかけだす。私ははやくあるけない。

「これでも、むかしは人をおいぬいて行ったのよ」と私はいう。

「コロナはもともと、太陽のいちばん外の光なんだよね」とウルエちゃんという。

「そのコロナにたとげが出ているウイルスがちらばっているんだけど、ウルエちゃんにはみえるの？」ときく。いくらウルエちゃんでも、ウイルスが見えるわけではない。

「小さくて見えないのはウイルス、大きくて見えないのはブラックホール」と、ウルエちゃんのはなしはとぶ。

「ブラックホール？ 見えない星ね」

「めちやくちやに大きくって重いんです」

「そういう星は、いんりよくが大きい」

「ものをひきつける力が大きいんだ」とウルエちゃんは私にべったりはりつく。

「大きくなりすぎた星はどうして見えなくなるの？」とウルエちゃん。

「ふうせんなら、大きくなりすぎたら」

「パーン」とウルエちゃんはさげぶ。

「そうならないで、かたまって行くのよ」

ウルエちゃんは白いポシエットの口をあけた。そして大きな赤いものをとり出した。

ウルエちゃんは小さなてのひらの上で赤いものをころがす。おだんごを丸めるようだ。見ているうちに、赤いものは小さな白いおだんごになった。白いおだんごは光っている。

ウルエちゃんがさらにころがすと、光をなくしたおだんごは小さな黒いつぶになった。

「まだ見える」とウルエちゃんはいって、黒いつぶをポシュエットにもどした。

「あの黒いつぶはものすごく重いから、小さくてかるいものがひきよせられる」と私。

「じゃあ、すごく重い星になるね？」

「星が重いと空間がゆがみます。時間もゆがむけれど。そこにおちると、二どと出てこられません。光も出てこられないから、ブラックホールは見えません」

土手の道は長くて、雨のあとの川はにごっていた。とてもむしあつい。そんなときに、川ぎしのしげみでうぐいすがないた。気のせいか、少し風がふいた。

「あめちゃん、ちょうだい」とウルエちゃんが手を出す。私はキャンディを一つ、ウルエちゃんにわたした。

「川の中のしまは、神さまをまつっているけれど、今年はコロナでおまつりがおやすみになっちゃった」と私はぼやく。

「ざんねんだね」とウルエちゃんという。

「ほかのぎょうじもみんな中止になった」

「イベントがなくなるんだ」

「なんにもないまいにちになって、ぶじでいられるのはうれしいけれど、たいくつ」と私はつぶやく。生きているだけでしあわせだが、人間はぜいたくな生きものなんだ。

「なんぼ、あるいた？」

「あの木のところで、二千ぼ」



土手の北がわに、青いクリーニングてんがある。土手の南に、大きな木がある。

「まんぼけい、見せて。あ、二千と七ほ」とウルエちゃんはすうじをよむ。

「あと千ぽでおみせだよ。ただのつめたいお茶がのめるよ」と私のはげますと、

「ぬるくてもいいから、レイちゃんのお水をちょうだい」とウルエちゃんはねだる。ボトルをわたすと、は
んぶんくらい、いっきにのんでしまった。

「このあいだ、パソコンでおもしろいきじをよんだよ」と私のはなしをかえる。

「なに、なに」

「うちゅうで、ぴかっと光ったんだって」

「かみなり、じゃあないね」

「そりゃもう、おおちがいです」

「ちょうしんせいがんばくはつした」

大きな星がばくはつすれば、明るい星になる。めずらしいことだが、ちょっとちがう。

「だったら、星と星がぶつかった？」

「うわー、すごくいせん行っている」と私はほめた。ウルエちゃんはとくいそうだ。

「あ、はしのたもとに来たよ。私と手をつないで。車が来るから、あぶないよ」

土手をおりて、お店につくと、だいたい三千ぽである。コロナでしまっていたイトインがあいたので、そこに入る。ウルエちゃんはおくのトイレに行った。もどって来たので私もトイレに行く。トイレはきれいだが、手をかわかすジェットがつかえない。

きゅうちゃきのかみコップをとって、つめたいお茶のスイッチをおす。三つめのキャンディはウルエちゃん

がたべる。

「星と星がつぶかったんじゃないんだね」

ウルエちゃんが首をひねると、むぎわらぼうしのふちが、私のぼうしのふちにあたった。

「まさか、ブラックホールとブラックホールじゃないよね？」

「大あたり」と私は手をたたく。

「見えないものどうしが、やみのなかでぶつかって、光ったのか！」とウルエちゃん。

「見えないけれど、ぶつかったわけです」

「目から火が出たね」とウルエちゃん。

ぶつかったあととは一つになるんだろうか。

「すごく大きなブラックホールのまわりをぐるぐるまわる、小さなブラックホールもあるんだって」と私はよみかじりをいう。

かいもののカートをおして、私とウルエちゃんはあるく。私はかぼちゃ、きゅうり、かつお、さくらんぼをかごに入れる。ウルエちゃんのおめあてはスイーツだから、キャンディをかごに入れる。私はスイーツじしくちゅうだ。でもウルエちゃんはけんこうだから、あまいものがたべられる。

「いいなあ、ウルエちゃんは」

みせを出ておお道に出る。かいものぶくろは重い。ウルエちゃんはキャンディのぶくろをとり出して、ポシェットに入れて、にこにこする。

「かえってからたべるのよ」

「はやく、かえろうよ」とウルエちゃんはぐいぐい私の手をひっぱる。青いクリーニングでんまで五百ぼか。つぎのみせで千ぼだ。



「やっと四千ぽ。あと二千ぽだよ」と私。

「おんぶしてくれー」とウルエちゃんがかじりつく。たのむから、もう少しがまんしてほしい。おんぶしてねちゃうと、ウルエちゃんは重い。小さなブラックホールみたいだ。

「一ばんちかくのおみせで、アイスをかおうとおもっているんだけど」と私はいう。

「じゃあがまんする」とウルエちゃん。

そして、めあてのおみせで、しろくまをかつていると、ウルエちゃんが、かごにドーナツを入れた。チョコレートをぬって、ピンクの星をはりつけたドーナツである。

ウルエちゃんはごきげんである。

「やっと、おうちに、つきました」

「まんぼけいは五千六百ぽ？ 六千ぽにはたりないね。しろくまちょうだい」

ウルエちゃんはしろくまをふくろからだして、小さな口をおおきくあける。私もしろくまを口にいれる。あまいミルクとくろいまめ、みかんとももとパイナップルのあじ。

ウルエちゃんはしろくまをたべおわって、ドーナツをふくろからだした。

「レイちゃん、これはブラック・ホール」

「なるほどね。でも、なかがからっぽじゃないの」

「ブラック・ホールのなかみは、ホワイト・ホールからでちゃいました」と、ウルエちゃんはすましていう。「うわあ、そうきたか」と私はわらう。

ドーナツをたべおわったウルエちゃんは、つめたいお茶をぐいぐいのんでいる。そして白いポシエットをあけた。ウルエちゃんはキャンディのふくろをだして、あける。「すいきんちかもくどってんかいめい。あ、めいおうちゃんはいま、はずれもんだった」というと、いろとりどりのキャンディは、くうちゅうにうかんだ。きのせい、キャンディが屋のようにみえた。

ウルエちゃんはさっきの黒いつぶを出して「コロナがきえるおまじない、あげる」といって私にくれた。

「ありがとう、ウルエちゃん」

「じゃあ、かえるわ。レイちゃん、ごちそうさま。またくるね」

「カタカナで、ウ、ル、エってかくと、空っていう字になるんだよね」

「あたし、そんなこと、言ったっけ？」

ウルエちゃんはそらつかいである。どこから来るのか、どこにかえるのか、私にはわからない。いつでもいらっしやい。

(2020年7月18日)